

西村繁樹君との50年

富澤 暉 陸自60

西村君が亡くなった。

先輩や同期生が亡くなっても全く驚かない歳になったが、後輩に急逝されると無性に寂しく辛い。老人の身勝手さであろうか。

「50年」と表題に書いたが、西村君と顔を合わせ議論した時間の正味は極めて少ない。だが、二人の間に三島由紀夫という歴史的人物があり、そのことに絡んだ西村・富澤それぞれの同期生が居て、更に、西村君が最後の本を出版した並木書房の社長・奈須田若仁氏の父上、敬氏が居られたことを思い出すと人生には何某かの筋があり縁があると思わざるを得ない。よって、思いつくところを記録として留めておきたい。

1 並木書房・奈須田社長と防大生

1968年の夏に私は指揮幕僚課程に入校し、御殿場から上京したのだが、住む家がなく、止むをえず妻の実家の2階に間借りをしていた。そこに並木書房社長の奈須田敬氏から連絡があった。

私は奈須田氏を、防大に取材に来た日本週報の一風変わった記者として覚えていたのだが、その後の10年間に会ったことはなかった。「ともかく銀座まで出てこい」というのでみゆき通りの奈須田酒店の上階にある並木書房の応接室を訪ねた。「今、民社党の若手政治家・学者たちと自衛官を結び付けようと考えている」「自衛官の方では君の義父（藤原岩市・陸士43期）レ

ベルの人たちと付き合ってきたがもう退官しつとあり歳もとつてきているので心許ない。これからは防大生と話をしたいのだが防大生といえは何と言つても1期生だ。君がその1期生を一人連れて来て欲しい」とのことであつた。私は恰好のメツセンジャーボーイであつたらしい。当時の陸自幹部学校では3佐になりたての3名の1期生が新任戦術教官で活躍していた。一番話しやすい感じがした田崎教官のところへ行つて「民社党の人たちと話をする会に行つてくれますか」ときくと「いいよ」とのことだったので、奈須田さんに「田崎さんを連れていきます」と電話で報告した。

約束の前日、田崎さんに「明日ですよ」と確認しに行くと「明日か？明日は一寸行けないな」と言うので「それは困ります。向こうには1期生を連れていくと約束しているのですから、

先輩が駄目なら他の1期生に頼んで下さい」というと「よし、それなら前川に頼もう」といつて部屋を出て間もなく戻り「前川が行つてくれるから、君は前川を連れて行け」とのことであつた。前川3佐は当時幹部学校に籍を置き、たしか日仏学院かアテネ・フランセあたりで仏語研修を受けていたのである。翌日、私は前川さんを案内して

奈須田さんグループの会へ行つた。仏留前の前川さんは奈須田さんにも民社党の若手連中にも敬意と好感をもって迎えられたと思う。末輩の私自身は引き続きの「小間使い」であつた。それからの半年ほど、奈須田さんの会に出る自衛官は前川さんと私だけであつたと思うのだが、その年の秋から冬にかけて奈須田さんが主催した「かすみ会」という会合に三ツ星（4年生を表わす）の防大制服を着た若者が防衛学教官の鈴木2佐（京都大学出身とお聞きした）に連れられて参加していた。それが正に約50年前の西村繁樹君だったのである。「良い度胸の、しかし一寸生意気な学生だな」と私は感心しつつ思った。

1969年春に入ると幹部学校の授業も忙しくなり、並木書房の方は専ら前川先輩が対応して下さるので私の足は次第に銀座並木通りから遠のいた。前川さんはフランスへ行かれるため奈須田さん関係のことについては当時調

査学校に居られた1期の伊佐地さんに逐次申し送り、その伊佐地さんが調査学校周辺に居た杉之尾、宮本（2名）とも入校時4期、卒業は5期）両君を私に次ぐメツセンジャーとし、さらに、1期の森野さん、中尾さん、3期の君鳥さん等を奈須田さんに紹介したと聞いていた。

2 西村君から「だら幹」といわれた私

1970年の春に私は指揮幕僚課程教育を終了して再び富士学校勤務となつた。希望していた機甲科部戦術班教官にはなれず、研究部研究員という仕事についた。1年8か月前まで住居としていた御殿場の借家がたまたま空いたのでそこにまた住むことにした。

ここに現れたのが富士学校特科（砲兵）初級幹部課程学生となつた西村3尉であつた。彼らの区隊長主任教官が一緒に幹部学校を卒業した同期の織田基生だったので彼から私の居場所を聞いてたたく研究部に連絡が入り「先輩と話がしたく同期生3人で自宅にお邪魔する」とのことだったので、家で待っていたのである。

6畳・4畳半の粗末な家であつたが、その4畳半の茶の間に小さな卓袱台を置いて若干の酒肴を出し、4人で呑みつつ話をした。彼らは3尉の階級章の

ついた制服を着ていた。

話と言っても喋ったのは殆ど私とその正面に座った西村君で、左右に居た二人は殆ど黙ったままであった。その二人は松川と柳沢と名乗ったが、後になって考えてみると二人とも陸将になつた人物で、多分、当時から優秀な学生であつたのだからその時はとても静かであつた。

松川君には私が陸幕長時代の運用課長として、ルワンダ難民支援、阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件等で大変お世話になつたが、それらの騒ぎの中でも積極的になつてなご寡黙な人であつた。柳沢君は76年に私が上富良野の戦車大隊長に赴任した時に同駐屯地の特科大隊・中隊長をしており再会その後、陸幕や同じ千石の官舎住まい等でよく顔を見合わせる仲となり、特に最近の10年程は借行社で多く仕事をともにした。私もお喋りだが、彼は私に輪をかけた議論好きである。あの初対面時に、何故あんなに大人しくしていただろうか。おそらく真ん中に座つていた西村君の勢いに呑み込まれていたのではないかと思う。

後で聞いた話では、三島さんが「楯の会」メンバーの中から本物の自衛官が出て良いのではないかと云つたことに応じ明大から自衛隊に入隊した今野茂雄君（現借行会員）が久留米の幹

部候補生学校で「三島イズム」を同期生である彼らに伝えたというところらしい。だから、西村君だけがその思想に染まつていて、松川、柳沢両君の本心は西村君とは違つていたのかも知れない。

西村君は「三島先生は学生運動に対する治安行動に合わせてクーデターを起こし自衛隊を真の国軍にしよう、と言つておられます。先輩には一緒にやる気はないのですか」というようなことを言つていた。私は「実は丁度3年前、君が今座つている場所に三島さんが座つていて話したことがある。その時はそういう話はなかつたのだが、その数日後、三島さんが会費を出してくれ、御殿場の料理屋で我々同期生5、6人と会合を持った。その時にそういう話が出て我々は『そんなことは出来ないし、やらない』と言つた。もう3年前に終わった話だよ」と答えた。何回かの問答の末に西村君は「富澤さんのような『だら幹』とは話ができない」と怒りだした。私も「だら幹」の意味は分かつていたが、逆上することもなく冷静に対応したものと記憶する。

その3年前、すなわち67年春の三島氏の我が家訪問と料理屋での会合のことについてはここでは述べない。興味のある方は『三島由紀夫と自衛隊（杉原祐介・剛介著、並木書房97年刊）と

『兵士になれなかつた三島由紀夫』（杉山隆男著、小学館07年刊）に書かれてるのでそれを覗いて頂きたい。

3 三島事件

70年11月25日の三島事件は全国民にとって衝撃的な事件であつた。

富士学校研究4課の馬場正道1佐（陸士58期）は「三島にこれだけのことを言われ実行されて、私が荏苒と自衛隊に居続けることは出来ない」と言つて静かに依願退職をされた。実に立派な先輩であられたので馬場さんを慕う多くの後輩たちに惜しまれ、あるいは上司たちから反対されたらしいが、馬場さんがその意志を変えることはなかつた。

しかし、このような例は極めて希であり、他に馬場さんのような話は聞いたことがない。

三島氏のこの言行については実に様々な意見が出され世に収斂するところはなかつた。

並木書房の奈須田社長は自ら編集するミニコミ誌「ざつくらん」に三島を惜しむ記事を多く出し、暫く後にはそれらをまとめて『わが友三島由紀夫』や『総括 三島由紀夫の死』等の著書を出している。「奈須田さんはこの三島由紀夫の志を受け継ぎさらに広めていくべきではないか」と主張している。

と私は理解していた。

私もがかつて尊敬した影山昭二防大教授（海兵76期）は「三島は名前を残すために死んだのだと思うよ」と言つたと祐介・剛介の『三島由紀夫と自衛隊』には書いてある。私自身の解釈はこの影山教授の言葉に近い。その行動を現在の社会は許さないがその志は生き続け「悠久の大義」として後世の人々の心の中に生き続けるだろう、という陽明学の「知行一致」の考えであり、だから我々は三島の後追いをするのではなく、三島神社が出来たならその神前にただ祈り、汚れた心を暫時でも浄めるべきだ、ということでもある。このことで、奈須田さんとは一寸意見が異なり若干の議論をしたことも懐かしい。

上述の書『三島由紀夫と自衛隊』は私の同期生・杉原祐介元1海佐が海自指揮幕僚課程の統率論文として書いた文章を、裕介の一卵性双生児（弟）であつた杉原剛介福岡大教授（元2等陸尉）が兄の病没後に書き足して『菊は咲くか』という小説にしたものを原典としている。小説の主人公は菊川孝一、裕介役は横田宏、剛介役は横田武となつていたのだが、これを読んだ奈須田社長が、菊川を同期の菊地勝夫（後の借行社事務局長）、宏を杉原祐介、弟の武を杉原剛介の実名に戻し、実録

風の文に直して並木書房から出版したものである。

当時、文藝春秋の編集長が菊地の仙台二高時代の同級生であり、また奈須田さんと昵懇の仲だったこともあり、出版前に文藝春秋に菊地が書いた要約文が前宣伝としてでかどと掲載された。これを我々同期生は嬉しく読んだものである。

私は無論防大時代から菊地を知ってはいしたが、本当に親しく話すようになったのは、退官後何年か経ち、二人と一緒に借行社の役員として働くようになってからである。そして二人きりで話す機会も増えたが、そうした時、「三島の死」について話すこともあった。

その時、「菊は咲くか」・「三島由紀夫と自衛隊」の両著に書かれていた「最も大切な命は部下のために捧げる」という西郷南洲の言葉が話題になった。「三島さんは陽明学に基づいて悠久の大義のために亡くなったとも思うが実は『楯の会』の解散を秩序あるものとするために、即ち『100名の会員たちの今後のために』あれを決行したのではないかな」と私が言うと菊地が即座に「実は最近、俺もそう思っているのだ」と返した。

69年12月の総選挙で自民党が勝利し社会党が議席を減らすと、70年になってからの学生・労働者の反安保・ベト

ナム反戦運動の力はとみに衰えた。そういう中で「楯の会」は目標を見失ってしまい、この会の維持は困難になったと思われる。一部の会員に分派行動の兆しが現れていただろうし、運営資金の工面も難しくなっていた筈である。会の維持・発展が絶望的であれば解散するしかないが、100名もの若者の会を解散するにはどういう大義名分とパワーが必要か、三島氏にとって最大の難問であったと思う。「楯の会」を乱れなく整然と解散させるためには「自分が死ぬしかない」そう思ったに違いない、そして森田必勝はそれに殉じた。菊地と私の結論はそこで一致した。

4 西村繁樹君のその後とノルディック・アナロジ

「富澤さんのような『だら幹』と言われ玄閣に送り出してからの西村君の行動を私は知らない。ただ三島事件の後『最後に三島氏と会ったのは山本(舜勝)1佐か菊地1尉か西村3尉か』という噂が聞こえてきたことがあり「彼らが警務や警察から調べられたが結局、何もなかった」との話も聞いて「よかったですな」と思っただけである。

78年夏、北海道の戦車大隊長を2年務めて東京に戻ると色々な部外の方々と会う機会が増えた。当時陸海空幕や

各幹部学校に群がっていた防大5期の後輩達が「ごきぶり会」と称して勉強会や呑み会をやっていたのだが、どういふ訳か私はその客員会員として呼ばれることが多かった。彼らは61年春入隊なので、同じ61年春外務省入省の佐藤行雄前安保課長を「ごきぶり会」会長としていたが、当時、国際参事官として防衛庁にいた岡崎久彦氏や警察から教育担当参事官として出向してきた佐々淳行氏等にもこの会でお会いしお話を伺ったりしていた。その頃岡崎氏の下に英語の出来る補佐役として西村君がっていたら嬉しいのだが、私はそれを全く知らなかった。

更に10年も経った88年頃、陸幕教育訓練部長になった私は「西村君が岡崎さんの支援を得て米国ランド研究所やハーバード大学で勉強して帰国、今は陸幕や幹部学校で留学研究成果を開陳して高い評価を受けている」との話を聞いた。

私は防衛力整備の一部に携わったことはあるが、部隊運用については方面隊以下のものを除き関わったこともなかつた。よって自衛隊全般の運用などに関心はなかつた。

自衛隊の学校で帝国陸海軍や自衛隊の歴史を学んで「元々、日本には軍事戦略はなく、出来ないんだな」と諦めていたし、76年頃に来た「基盤的防

衛力」についての説明をその数年後に聞いて「これを戦略というかどうかは別にして今の自衛隊にはこれしかないんだらうな」とある意味で得心していたのである。

そこで、ある人に「西村君の自衛隊運用案とはどんなものか」と聞いた。「バルト海のソ連海軍が外洋に出ないようにその進出あい路をデンマークとスカンジナビア半島の陸軍が守っている」「これと同じことを宗谷海峡と津軽海峡でやり、日本海のソ連艦隊が太平洋に出ないようにすれば、米ソ戦は生起しない。米ソ戦がなければ日本は平和である」という説明を受けた。また「それをノルディック・アナロジ」とも聞いた。

特に「米ソ戦がなければ日本は平和である」という言葉が気に入った。「これこそ現実の部隊運用を取り込んだ基盤的防衛力だ」と思った。

この話を聞いて当時の防衛部長・西元さんが「この案頂いた」と言われたとも聞かされたが「さもありません」と感心した。

現在「基盤的防衛力構想」を評価する人は少ないが私はその後もずうっと「基盤的防衛力をもって、米国と中口が戦えない態勢にもっていくことが唯一最高の日本の軍事戦略だ」と考えている。

まだ西村君が防大教授だった頃、彼の部屋を訪ねて「最近南西諸島防衛はアナロジュー・オヴ・ノルディック・アナロジューだと言われているが、違うんじゃないか」と聞くと彼はその間に答えず「もつと大きく台湾を含んだものを今考えているんです」といった。「そりゃあ益々ないよ」というと彼は珍しく黙った。

この議論の延長戦をしたかったのだが残念である。

5 『三島由紀夫と最後に会った青年将校』について
昨年（18年）秋のことだが、西村君に他のことで電話をしたら「今、三島先生とのことある雑誌に書いているのですが」という話がでた。「ほう、日本一の戦略家が久しぶりに三島さんか、しかし三島さんに戦略はないな」と少しく驚いた。

ところが、本年（19年）夏以降、逆に本人から何回も電話が入るようになった。どうやら『三島由紀夫と最後に会った青年将校』という本を書いていられるらしい。「三島と最後にあった自衛官は本当に君なのか？」と聞くと「いや、私より後に山本さんや菊地さんが会ったということは明らかです。ただあの方々は青年とは言えないので青年将校なら私だけです」とのことであつ

た。こちらから質問したのはそのぐらいで、後は西村君の方から質問の電話が何回もかかって来てそれに応えることが多かった。

西村君と一番時間をかけて話したのは「三島氏が何故あのような行動をとったのか」という問題であった。私は、「楯の会を整然と解散させるために」という菊地案を説明したのだが、西村君は最後に「多分それが正しいと私も思います」と言っていた。

10月中旬、出版と同時に本を送ってもらったのだが数日をおいて全文を一気に読んだ。

一番気になったのは、電話で長々と話した上記の「部下のためにこそ死す」という問題に殆ど触れてないことであつた。

だが、西村君自身で「多分それが正しい」とは言ったものの、「天皇のため」「国のため」「社会のため」「仲間のため」「楯の会のため」「自分のため」の判別は軽々に出来るものではない。また同じ表現を使ったとしても「楯の会メンバー」であつた者と「自衛官」であつた者ではその意味合いが異なることがある。

「この件は問い詰めるべきではない」と考え直した。

それは別として、文の流れはよく面白く読んだので短い読書所見（別添）

を書いて10月19日に郵送で送ったら翌日には電話が来た。気になる表現があつたらしく幾つか質問されたが、全般としては満足だったようなので「他に書く人がいなければこの文を紹介文がわりに偕行に載せてもらおうか」というと「宜しく願います」とのことであつた。

10月24日の安保研究会終了後、柴田編集長にこの本を紹介すると「私が紹介文を書きましょう」といつてくれたので安心していたら1週間ほど後に、中川義章君の書いた紹介文案が電子ファイルで編集長から送られてきた。あの席にいた中川君が自主的に「私に書かせてくれ」と言い、数日でまとめたとのこと、まことに立派な内容のものであつた。そこで「①これなら良いだろう②掲載するのは12月号、1月号のどちらを希望するか③修正箇所があれば通知せよ」というメールに中川君の紹介文ファイルを添付して送つたら直ぐに西村君から電話がはいつた。

「①この文案で大変結構です②遅くて良いので部数の多い1月号に掲載して頂きたい③「楯の会」の盾は「楯」に修正して欲しい」とのことであつた。その翌日他用で会つた柴田編集長にその旨お願いしたので、機関紙「偕行」をお読みの皆さんには、1月号で中川君の紹介文を読んで頂ける筈である。

西村君の全ての遺作が国家の「精神」と「戦略」に関わる議論の良き叩き台になることを希いつつ、筆を擱く。

別添・読書所見
西村 繁樹 様
（19・12・10）

「書き物」は何よりも読者に面白く読まれなければなりません。この本はその点で合格と言えるもので、本当に良かったと思います。また森川氏の解説もとても良いと思いました。

三島の思想そのものへの理解、貴兄の人柄、Uの仲間（今野・中山）についての説明不足、森田必勝以外の楯の会メンバーへの理解、等々読者に残された疑問は無限にあるのでしようが、もうこれ以上、言挙げする必要はありません。

この本をフィクションとするかノン・フィクションとするかも他者（読者）に任せるしかありません。（私にとっては173頁以降の「ビッグ、イフ」がとても面白く真実に迫っていたと思います）

いずれにせよ1970年11月25日の

三島事件は日本精神史にとって大きな事象であり、この本は「当時の現職自衛官」の立場から書かれた重要な記録文書になるだろうと思います。

かつての青年将校の「さらに国に報ゆる義務」は、森川氏のいう「三島思想の伝承」ではなく、(この本は記録にはなっているが伝承にまではなっていないと思うので)やはり、実際の国家の行動方針を支えた貴君独自の「戦略への提言」にあると、私個人は期待しています。

あわせて、本が売れて並木書房が儲かるであろうことを祈っています。思い出すと、防大学生服を着た貴君に初めて会ったのは奈須田のおやじさんがやっていた「かすみ会」でのことでしたね。何よりもご健勝にお過ごし下さい。

敬具

10月18日

富澤 暉 拝